イマージョン方式によるバイリンガル教育について

― グローバル教育と実施状況報告 ―

ABCD 学院　学院長　千葉紘一

日本で最初の帰国子女のための英語補習校であるABCD学院での教育について報告します。
日本の学校での教育と並行して、現地校の学年レベルで英語によるイマージョン方式のバイリンガル教育を行っています。

1. はじめに

日本の教育は揺れています。英語教育（バイリンガル）問題はさておき、"ゆとり教育"と名打って進められた教育はあえなくも、文部科学省の方向転換で崩れ去ってしまいそうです。では、今後、どうなりましょうか？　この小文がひとつのヒントになれば幸いです。

2. バイリンガル教育の大切さ

帰国子女が外国で、現地校に入り、苦労して英語を憶え、バイリンガルとなることは、単に言語だけの問題だけでなく、その国の文化を受け入れ、良き理解者として、また、外国人の友人を作り、将来、大人になって活動するとき、その友人関係が有効に働くことと思われます。これは単に、一個人の財産だけでなく、社会としても宝物と言えます。

2. 1 バイリンガル教育で重要な年令は？

「バイリンガル教育の方法」で中島氏が述べています。結論のみ引用しますが、9才以上で、永久記憶が出来るようになり、これを越す年令までは少なくとも、バイリンガル教育を行なっていく必要があります。これ以前の8才位で帰国しても、英語教育を続けて行かないと、残らず忘れてしまいます。

2. 2 バイリンガル教育の理論

バイリンガル育成を考える上で、参考にすべき代表的な理論として、先ず、カミンズの"2言語共有説"があります。この理論が唱えられて以来、バイリンガル教育は全面見直しとなりました。従来、2つの言語が全く別物とする"2言語バランス説"が主力でありました。これに対して、2つの言語は個別のチャンネルがあるものの、根の所では互いに繋がっていると言う説で、今日、この"2言語共有説"が色々な言語環境で実証されています。2つの言語は、それぞれ、別個の音声構造、文法構造、表記法を持っており、表面的には全く異なって見えますが、深い所、特に抽象概念を示す語彙などや思考を表す所では共有部とされます。即ち、場面から離れ、高度の認知力を必要とする言語面では、既に持っている言葉の力が土台となって、新しい外国語の学習に役立つということです。高度の外国語を習得できるかは、ある程度、母語または第1言語の成熟度にかかっています。

従って、海外に出て、現地校に入り、英語で苦労している子供を見て、「今、英語で苦労しているから、日本語の勉強をさせるのはかわいそう」と言うのは逆で、長い目で見れば、むしろ、こう言う時こそ、日本語の勉強を続ける方が良いと言えます。

3. イマージョン教育とは

では、英語が話せる帰国子女の場合どんな教育が適切でしょうか？この答えはイマージョン教育にあります。これには下記の2つの方法があり、内容は異なります。

2言語充実モデル：カナダのイマージョン教育法で、高度の2言語習得を目指した方法

過渡的モデル：アメリカで行われていて、学力の停滞を防止するため現地語がマスター出来るまで、一時的に2言語を使用する教育方法（サブマージ＋母語使用の併用法）

(註＊) 帰国子女の場合、週末、補習校で、母語を使用し補強していると言えます。以下後者として述べます。この方式では教科と言語学習が一緒に行われます。

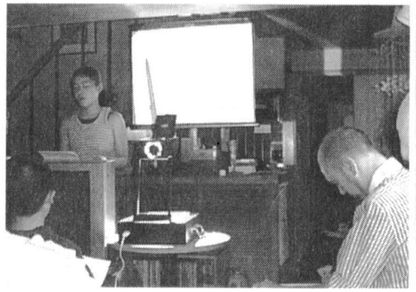
（1）利点：
- モチベーションの向上する。
- 会話力から、認知・学力面の向上が図られる。
- 学校全体が語学教育の場となる。

（2）問題点：
- 内容に追いつくのが優先されるため、言語表現能力は後になり、マスターするまでには時間がかかる。
- 講師は教科と言語教育の両方が出来る必要がある。

4. 日本の教育の問題点

ここでは、日本の教育の内容について、若干問題提起をさせていただこうと考えます。

日本の教育は、大雑把に言って"記憶中心の教育"と言えます。これに対し、近年のアメリカの教育は"考えさせる教育"と言えると思います。日本の教育は大学の受験制度中心であり、記憶の多さを競うため、必然的に、この様になったと理解できます。最近、徐々に、論文形式の問題が出題される等変化しつつあるものの、基本的には、大学入試制度を変えなければ、大幅な改革はできないと思います。具体的に何が問題かと言えば、先例のない問題に対し解決能力がなく、変化の時代に対応できないことです。これにはクリティカルシンキングを基本とする"考えさせる教育"をしなければ、創造性や問題解決能力はできないと信じます。



5、論理的思考とクリティカルシンキングとは何か

"考えさせる教育・クリティカルシンキング"は日本人には「言うは易く、行なうは難い」と言えますが、以下に、この方法を述べたいと思います。

5. 1 日本人が論理的でない理由

日本人は論理的でないと言われます。外国人から見ると、あるいは意見を聞かれると、あいまいに聞こえます。しかしながら、日本人は日本人として、決して"論理的でない"とは思っていません。これがすれ違いの始まりです。今後共、グローバル化が進み、対外国人と交渉や、ディスカッションを行う機会が増え、すれ違ったままではすまされません。

しかし、言われてみれば、私達は概ね単一民族であるため、細かく述べたり、説明を要しません。おまけに、詳しく説明をすれば、"くどい"と言われます。従って、日本だけの"村"社会では問題なくとも、世界を相手とする外国では問題となります。即ち"国内モード"と"世界モード"と切り替えて使う必要があります。

5. 2 論理的であるための方法

先ず、クリティカルシンキングの一過程として論理的思考をどの様に育成するかを考えたいと思います。

（1）二項対立で考える方法

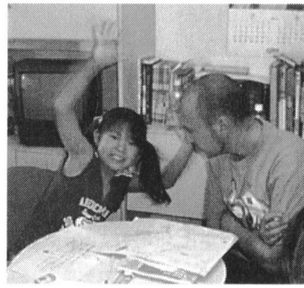
あるものの実態を捉えるには、少なくとも、正面だけでなく、裏面から見る必要があります。これと同様に、抽象的な物事，思想も反対の立場で考えて物事が明確になります。また、他と比較することによって、違いが見えてきます。例えば、人と自然、人と動物、男性と女性。抽象的な問題では、本音と建前、理想と現実、自由と責任、権利と義務。政治的には、資本主義と共産主義または民主政治と独裁政治等です。

この様にして、2つの対立関係に立って両方の立場から分析することで、より多面的で、正確な判断が出来るようになるのです。西洋人はこのように教育を受け、また、習慣づけられてきました。即ち、論理的思考の基本は、主体と客体を明確に分けて考えることです。自分自身の肉体や内面を客観的に観察できることです。逆に、日本人は、歴史的に仏教や禅の思想が中心にあるため、二項対立で物事を考えません。例えば、人間と自然を対立視せず、人は自然の一部であると考えています。対象と自分を明確に区別せず、自分と対象とを一体化して考える習慣があります。このように対象と一体になると対象を客観的に把握できなくなります。ですから、日本人は論理的でないと言われるのです。なお二項対立の訓練にはディベートが最適です。

5. 3 クリティカルシンキングとは何か

直訳すれば、"批判的思考"となりますが、一般的に、批判的と言うと否定的内容をさすことが多く、必ずしも妥当な意味を表す言葉となりません。クリティカルシンキングとは、自分で方向付けを行ない、自分で自分の思考をチェックし、修正する行為を言います。これには論理に基づき、他者（第三者）の立場を尊重し、自分へ向けての評価を含むものです。即ち、自問自答することにより"公正"となり得る思考方法を言います。

5. 4 クリティカルシンキングの方法



公正か否かのチェックの過程で常に基準を参照する必要があります。これを実践するには、知的基準をきちんと認識し、意識して取り入れて行くことが前提となります。また、クリティカルシンキングで大切なことは、自分の思考の中で、無意識であったことを意識化のレベルに引き上げるということです。

（1）思考の基準とは：以下の要素を当てはめます。

明瞭性、論理性、正確度、的確性、重要性、公正さ、完全性などです。

（2）非理性的な傾向を克服するには：

人間は往々にして、非理性的な行動を取ることがあります。人間の非理性の裏にある究極のものは自己中心性といえます。人間は訓練されて初めて、自分の自己中心性に気がつくことが出来ます。自問自答するとはこの作業のことです。

自己中心性の克服方法として以下の手順を実施する。
- 自分の持つ非理性的思考の発見と理解
- なぜ自己中心性が生まれるかの理解
- 自己中心型でない思考と論理の理解

（3）クリティカルシンキングの効用
- 複数の視点での思考の強化
- 対人関係が強化〈Win-Win 思考の向上による〉
- どんな状況でも、対応できる考え方の訓練
- 日常の仕事や生活が円滑化
- 異文化適応力が強化

次回は、
ここに述べられた考え方を基本とした「学院のグローバル教育」と
具体的な「実施例」について、報告します。

千葉　紘一
ちば　こういち
ABCD学院　学院長

ABCD 学院
〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-26-12
TEL:03-5365-1341　FAX:03-5365-1340
http://www.abcde.co.jp/

編集長から一言

7年前に開校した日本で最初の「英語補習校」の千葉学院長からの報告の第1回目です。

最初は、ABCD 学院の教育の基本理念の「イマージョン」と「クリティカル・シンキング」の説明です。ABCD の「D」が示すように、ディベートのレベルまで英語力を伸ばすのが目標です。そのためには、ネイティブの先生によるレベルの高い徹底したイマージョンと、リサーチとプレゼンテーションの繰り返しのトレーニングが必要です。

週日は日本の学校で日本語で学習、土曜日は ABCD 学院で英語で学ぶ。まさに、海外の補習校の英語版の学校です。帰国児童生徒の為に、その必要性が高まってきています。